ベルトコンベヤーを流れる、乾燥させた繭から規格外のものを除く「選繭（せんけん）」。中の汚れを見やすくするため、下から光を当てる。

煮た繭から糸を出し、目的の太さの生糸になるよう繭糸をより合わせる「繰糸（そうし）」。繭糸1本の太さは、髪の毛の約4分の1といわれる。

■技術の継承と新たな試み

生産量の減少や海外産の生糸との価格競争など、製糸業を取り巻く環境は厳しい状況が続いています。そんな中でも活路を見出そうと、また多くの人に蚕糸への興味を持ってもらおうと、碓氷製糸はさまざまな試みを始めています。

例えば「蚕は捨てる所がない」という言葉がありますが、これまで廃棄していた、糸をほぐすため繭を煮た水の天然成分に着目し、これを活用したシャンプーやヘアマスクを開発。主製品の生糸に加え、副産物の利用価値を高めようと研究を進めています。

碓氷製糸の取材の帰り、庭で見つけた猫。蚕や繭を食べるネズミを退治してくれる猫は、昔から養蚕農家で大切にされてきた。

■繰糸機を富岡製糸場へ

また、昨年は富岡製糸場の世界遺産登録10周年を記念し、工場の特別見学会も開催。全国から400人以上が訪れました。見学会の参加者には富岡製糸場も一緒に巡る人もおり、現役で稼働する碓氷製糸の機械に驚く人も多いそうです。

これに関連して、県などと協力し碓氷製糸の繰糸機の一部を富岡製糸場に移し、実際に動かそうという計画も検討されています。稼働に際しての技術指導は碓氷製糸が担う予定です。もし実現すれば、国内外に向けた新たな観光資源になるだけでなく、日本の製糸業の技術を伝える絶好のチャンスにもなり、今後が期待されます。

■良い糸を作り続ける

碓氷製糸の安藤俊幸社長は、「良い糸を作り、国産の糸を絶やさないことが使命。全国でも数少ない製糸会社を維持し、発展させていくため、自分たちの取組みを地域の皆さんに知ってもらえるよう活動していきたい」と話します。

明るいきざしもあります。今年4月から、大学を卒業したばかりの安中市地域おこし協力隊員が碓氷製糸に着任し、ベテランたちから製糸技術を学んでいます。

「良い糸を作り続け、国産生糸を絶やさないことが使命」と話す安藤社長

また、1,300年以上続く神事、20年に一度伊勢神宮（三重県伊勢市）の社殿を建て替える式年遷宮（しきねんせんぐう）（次回2033年）で新調される衣服や調度品に使われる生糸の多くを碓氷製糸が生産することも決まりました。

「日本で最後の碓氷製糸」の役目は、まだしばらく終わりそうにありません。事前に予約すれば、工場見学もできます。安中市が世界に誇る蚕糸業、碓氷製糸について少しでも知っていただけたら幸いです。

碓氷製糸のHPはこちら